

とある幼女の最強恐竜 (一旦完結)

カリーシュ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

コスタリカに浮かぶ、とある島―

その後、大惨事の現場となる夢のテーマパーク『ジュラシックワールド』が開園する場所で、

数多の恐竜のDNAを組み込んだ怪物

『インドミナスレックス』が二頭、誕生した。

しかし二頭は、無惨にも姉妹に殺され、成長したのは一頭だけだった。

これは、ifの話―

もしも―この殺された一頭が、

死んだとされ、死体が破棄された幼体が、実は生きていて―

その悲劇を知った何者かによって、異世界にて生きていたら―

……これは、そんな幼体のハチャメチャな冒険記。

――

どうも、カリーシユです。

今回は、テレビでの『ジュラシックワールド』放送記念として、この話を投稿しました。

注意点は、

・ 即席で作った設定。

・ 駄文。

・ひたすらふざけ続ける。

・短編。 続けるかどうかは未定。

以上のモノがオツケーという方は――

ゆっくりしていつてね！

目次

エピソード	142
第9話	128
第8話	115
第7話	106
第6話	89
第5話	72
4話	58
3話	36
2話	18
1話	1

1話

side??

……あれ、ここはどこだろう……？

「如何だ?!」

「駄目だな。傷が深過ぎる」

……たしか、おねえちゃんとごはんのとりあいになって……

「破棄だ?! コイツにどれだけのコストが掛かったと」

「まあまあ落ち着け。どうせコイツらは二頭いるんだ、片方が死んでも問題無いだろう」

うにゆ……………いいかんじにゆれて……………

……………おやすみなしやい……………

「—あれ？ ついさっきまでちゃんと持ってたよな？」

……………どっかに落としたか？ ヤベエ、バレたらクビだ！

物理的に首がトンじまう

!?

テイラノのエサはイヤだあああああ!!」

「……………おい、何をしている？」

「／＼（＾ρ＾）／人生オワタ

—とある日—具体的には、
2017年8月5日の早朝

— 八坂家

side 真尋

「……ふああー昨日夜更かしし過ぎたな」

久し振りに居候邪神sがアニメか怪しい謎放送以外の番組を見てると思つてみたら、まさかのパニック映画だったからな……

しかもあの後、「過去編が気になりますね！　ね!!　ね!!」と押し切られ、第1作から3作までぶつ通し……

「…日曜だし、母さんもいるし……」

もう一眠りして大丈夫だよな」

「そうです。レッツ二度寝タイム！」

取り敢えず流れ作業でベットのの中に這い寄る混沌をフォークで刺して窓から捨て「ひでぶ!!」、枕に頭を沈める。

ついでに湯たんぽみたいに暖かいモノがあつたので、少しばかり冷えた身体を温めr

「……………湯たんぽ？」

夏だぞ？ 蒸し暑い夏場の布団の中に湯たんぽとか、病人相手じゃなければ拷問だ。

「さつさと叩き出し——いやまずは様子をみよう」

布団を捲ったら神話生物とコンニチハはS A N値がヤバい。

タダでさえここ最近は何々あって、精神的にキテるのに。

まず大きさ。

結構小さい。 多少無茶をすれば片手で支えきれんだろうサイズだ。

次に触感。

ザラザラしてるが、全体的にヌメツとしている。

最後にシルエツト。

……シャンタツ君じゃないことだけは確かだな。

翼無いし。棘生えてるし。

「……しようがない。クー子でも呼ぶか」

夜通しゲームがデフォルトのあいっなら起きてるだろうし。それに、部屋に呼んで

1番安全なのがクー子だ。

……なんで同性のハス太よりも安全なんだろう。涙が出て来る。

思わず涙が出てしまったようで、視界が歪み、布団に赤いシミが広がったように見え

t—

いやどんな幻覚やねん。

「……………シミ……!?!」

慌てて捲る。

血塗れの生命体X（ただし虫の息）とコンニチハ。

「ぎやあああああ?! に、にや、ニヤル子おおおお!! これはどういうことだあああああ!!」

寝起きドツキリ? 寝起きドツキリなのか!?

悪質過ぎるだろおおおお!!

そして伏線は何だったんだあああああ!!

「……少年、うるさー」

………それ、どっちの破瓜の血? 答えによつてはー」

「オイバカクロスファイアシークエンスは辞めろ! ちよつと手伝え!!」

慌てて跳ね起き、布団を蹴つて退かす。

そこまでやればベットの上的惨状が見えたようで、クー子の眠そうな目が見開かれる。

「………少年が産んだ?」

「だから僕は男だああああ!!」

「……冗談」

火炎が引つ込み、クー子が例の生命体に触る。

「……少年、ハス太を呼んできて」

「何か分かったのか?!」

「……逆。種族も、何で血塗れなのかも分からない。でもハス太なら」

「元セラエノ図書館員―成る程！

すぐに連れて来る！」

部屋を飛び出て、奥の物置―今は連中の根城と化した空間―のドアノブを金髪の顔のマークに合わせて開ける。

「Z z z ……駄目だよまひろくん、そんな、ニヤル子ちゃんたちの目の前でなんて
……………」

閉める。

深呼吸。心を落ち着ける。

「take two」

ガチャっ！

「ZZZ………駄目だよまひ「言わせるかあああああ!! 起きろハス太!! 緊急事態だ!!」

んんん………ふえ？」

「そうですよハス太! せっかく真尋さんが起こしに来てくれたんですから3数える内に起きなさい!」

「じゃあ頼んでやるから星に帰れ」

「ハス太、永遠にゆつくりしていていいですよ」

「そう言いながらボールを振り被るな!」

「フオークっ!?!」

いつの間にやら復活していたニヤル子（気絶中）と、まだ半分寝ているハス太を強引

に引き連れて部屋に戻る。

流石に状況が状況な所為か、クー子は特にふざけたりせず、傷口を低温で焼いて止血を試していた。

「……少年、遅かった」

「悪い、色々あった」

「……便利な言葉。ハス太、後は任せる」

「ふえ？ ふえ?! ふえ!?!」

「何このいきもの!?!」

「おっかなびつくりといった具合に謎生命体に触る。」

「……少年、一つ分かった。」

あの生き物、同じくらいのサイズの生き物に襲われてあんなったと思う。多分、犯

人は同族」

「同族?」

「……ん。牙とか、爪の大きさとかと、傷の大きさが大体一緒」

「……よく分かったな」

「……少年、褒めてくれてもいい」

「あー、後でな」

考えてみれば、2人揃って手が真っ赤だ。この手で髪なんか触った日には洗うのが大変だろう。

……ハス太のベットシートはちゃんと洗っておこう。

「ふええええ………」

「どうだ、何か分かったか？」

「全然……見た事も聞いた事もないし、種族が分からないから薬も使えないし………」

「オイ待て、ハストウル製薬の薬に種族単位での分別があったのか？」

「……ひ、人と邪神はあれるぎーとかが一緒なんだよ」

そーなのかー。なら目を合わせて喋ろうな？

「ー何やってるんですか。」

構わずバーツと殺っちゃいましょう、バーツと!!」

「おいニヤル子漢字?!?!」

いつの間にか復活していたニヤル子が、懐から取り出した液体を謎生命体にぶっかける。

「何ヤツてんだこのバカアアアアアアアアアア?!?!」

「ご心配無く! 今のは『げ○きのかたまり』をすり潰した粉を溶かしたモノで」

「ポケモンじゃねえんだからんな怪しいモン振り回してるんじゃねえええええええ!!」

それに本当に効果があるなら夜鬼にポコられたシャンタツ君に使ってやれよ!」

「この薬はルルイエの一件の後、地球原産の素材で作ったからあの時は無かつたんです!」

「材料言ってみ」

「苦虫、アオキノコ、ハチミツ、マンドラゴラ」

「ゲームが違う! それ『げん○のかたまり』じゃ無くて『秘薬』じゃん?!?!」

「……ニヤル子、それよりも活力剤からのケルビの角の方がいい」

「いにしえの秘薬にすればいいってモンじゃ無いだろ?!?!」

「あ! めをさましたよ!」

「効いたよ!! 効いちやったよオイ?!?!」

体躯の割に円らな瞳が見え、弱々しく「きいー」と鳴いている。

「ああもう！ ニヤル子、脱衣所からタオル取って来い。ハス太とクー子はまず手洗って着替えたらi A i A P a dで出来るだけ調べておいてくれ」

「……分かった」

「う、うん！」

「邪神ひと使いが荒いが人ですなー真尋さんh

「今すぐ持つて来いでなきやフオークで生皮剥いでタオル代わりにするぞ」
ク ロ ッ ク ア ッ プ
生体時間加速して持つて来ました」

顔を青くして震えながらタオルを差し出して来た。

それを取って、血を拭っていく事数分――

なんか見た事ある奴になった。

具体的には、昨日の映画ラッシュの最初に見た作品で、1番大暴れしていた『イ』から始まる奴。

「お、おい、ニヤル子、これ……」

「何ですか？ 言っておきますけど私は別に男子のお宝など……」

縦に幅の広い顔。

紅い瞳。

背骨に沿って生えた棘。

緩くカーブした鉤爪。

白いウロコ状の表皮。

うん間違えない。

「――ニヤル子ちゃん、変なニュースが……」

「……今朝、そこそこの規模の次元振動があったらしい。

異世界からの迷子の可能性

が……」

「………恐竜?! しかもインドミナスレックス?!?!?!」

で、即争奪戦となった。

「か、カワイイですね! 触らせグウウエイ!」

「まだ弱ってるから駄目だよわあ!」

「………手当ての語源は、手の緩い温度が自然治癒に1番良いとされていたから。 だか

ら温められる私が触るべきメラっ!」

「邪魔しないで下さいクー子!」

「お前らが1番邪魔だああああ!!」

枕元のフォークを全弾飛ばす。

「ぎやあああああああ?!?!」

「」

「真尋くん、お湯でふやかしたヤギ肉でいいかしら?」

「準備良すぎ!？」

2話

side 真尋

「—で、さつきポロツと言つてた『次元振動』って何だよ」

場所は変わってリビング。

インドミナス（仮定）はチハス太とシヤンタツ君ーム小動物に任せ、こちらではババカカ2人がさつき漏らした新設定を聞き出す。

「……少年、ルビと本文が一緒」

「平然と地の文にツツコんでんじゃねえよメタいよ。」

で、結局なんだよ30字で説明しろ」

「いやあ、流石に30字じゃあ……」

「はあ……分かった。じゃあ90字な」

「次元振動というのは、ハッキリ言って私たちにも正体が掴めておらず、分かっていることは、それが発生すると異次元の存在や世界――

創作物だったり自分自身だったり――が現れるという事だけです」

「わざわざジャストにしなくていい。」

……という事は何だ？ ゲームや映画の世界は別世界で実在するっていう事か？」

「そうなりますね。」

『神様に合わないで転生してソッコで死んだww』とか、『ドッペルゲンガー』とか、『幻想入り』とか呼ばれるモノの原因とも言われていますよ」

「マジかよ」

……でも考えてみれば、クトゥールー邪神群こいつらも創作神話だと思ってたんだよな。

それに比べれば、最初から潜んでいたか、後から異世界のスキマから来たかの差だしな。

「……あれが『本物』だとして――

お前らの職場惑星保護機構はどう動くんだ？」

「ええと――監視、害になるようなら即、処分ですね」

「怖っ!?!」

「……多分、処分は無い。映画のあの10メートル強のサイズならまだしも、あの状態なら危険は無い——」

「みいー!?! みいー!?!?」

「ぐるるるる」

「ちよっ?! シヤンタツ君はご飯じゃないよ!?!?」

「……危険が、何だって?」

「……あれは多分幼体。成長したら大変」

「ならさっさと処分するとうましよう。クー子、非常時に支給されたのがあったでしよう。出しなさい」

「……ニヤル子のは?」

「売りました」

クー子がスカートの内側からビンに入った飴状の物体を取り出す——って、

「お、おい、何やってー」

「はい、アーン」

「聞けよ人の話?!」

ツツコンでる間にインドミナス（仮定）が、飴状の物体を一粒どころか何粒も食べる。

「……なにつて、このタイミングでは毒薬以外にありえない」

「……………だよな」

情に負けて育てれば、間違はなく、手に負えなくなる。

それは分かっているのだが……目の前で命が消えていく事に耐えられず、背を向ける。

「……………少年、」

「分かっている。誰も悪く無い。

……………行こう、ハス太」

「ふえ?」

状況が分かかって無いらしいハス太とシャンタツ君を連れてリビングを出る。

どんな毒薬なのか分からない以上、シヨッキングな映像になるかもしれないのだ。

映画の死にのシーンにですら毎回驚いていたハス太が見るには、早過ぎる。

「…………結局、何も出来なかった……………」

「…………で、どうしてこうなった？ 3行で答えろ」

「クロー子が間違えて、通販で買った薬を渡した。

薬の中身は前にシャンタツ君が飲んだ擬人化薬の改良版。

結果こうなりました。

おのれインジエン社!!」

「インジエン社は関係無いだろうが!!」

「あべしっ!?!」

状況説明。

Tシャツ一枚の銀髪幼女がソファアで焼いた肉にかぶりついてる。

いやーほんとおいしそうにたべるねーあははははははは(↑現実逃避)

「かいりようばん?」

「ええ。なんでも、シャンタツ君が食べたヤツにハチミツを練り込んだら出来たよう
で。ちゃんと人語を話せるようになったとか」

「……主成分がドキドキノコだからって、安易な発想。レビューでも批判的なコメン
トが多かった」

「ならなんで買ったんだよ!?!」

「……チャレンジ精神？」

「僕に聞くな!!」

「はうっ!?!」

眉間にフォークを突き刺してやる。

……まあ、結果としては、一つの命が救われたからいいとして。

「……もういい。それよりもあいつをどうするか決めないと」

振り向く。

銀髪幼女が土下座状態で震えながら焼けた肉を差し出していた。

「………あ？　ちよ、なんで？」

「む、むれのおさが、い、いちばんさいしよに、ご、ごはんをたべるから」

「群って……ラプトルの遺伝子か。」

て言うかなんで僕？」

「お、おさが、い、いちばんつよい、から」

「oh………」

あれか？　フォークでドーンのインパクトが強過ぎたのか？

試しにフォークをポツケから取り出す。

「ピィィっ！」

震えが一段と強くなる。

フォークをしまう。

震えが少し収まる。

フォークを取り出す。

震える。

フォークをしまう。

震えが収まる。

フォークを取り出して金属摩擦音を立てる。

失神した。

「もう辞めてあげてえ！」

その子のライフはもうゼロです!!」

「うおっ!」

ニヤル子が腕を広げて立ち塞がる。

……言われてみれば、なんて事をやっていたんだ僕は。

わざと幼女を怯えさせるなんて、最低n

「私たちの愛の結晶をつ!! 虐めるだなんてっ!!」

「さつきまで毒とか処分とか物騒な事をやってた奴が言うな!!」

ニヤル子の目玉にフォークでドーン。

……完全に怯えた目で見られた。

なんだろう、この罪悪感。

この後、メチャクチャ必死に誤解を解こうとして失敗した。取り敢えず「おさ」は止めてもらうことには成功したが。

「—そういえば、コイツが本物の『インドミナスレックス』だとして、パークは大丈夫なのか？　モグモグ」

「本人に聞いてみればいいじゃないですか。　どうせ私達には分かりませんし。　ガツガツ」

「それもそうだな。」

「……なあ、どこから来たんだ？　ムシヤムシヤ」

「んぐんぐ………わからない。」

わたし、おねえちゃんとはんのとりのりあいになって、けんかして、きがついたらここにいた」

「お姉ちゃん………インドミナスは二頭いたのか？　バクバク」

「……ゴクゴク、そう言えば劇中で、獯猛さの説明で『二頭の内一頭がもう片方を殺した』って言ってた気がする」

「じゃあストーリーは繋がるのか。」

「………て言う事は、映画のアレとは別個体なのか。　モグモグ」

真つ昼間からの焼肉パーティーをしながら話し合う。

なにせこの幼女、最低でも僕が何か食べてないと何も口にせず、なのにお腹を鳴らしながら涙目で見上げてくるのだ。

どうして無下に出来よう。

誰だつてそーする。

真尋だつてそーする。

「チツ……まさか真尋さんがロリコンだったとは」

「フオーク封印解除しようか？ バクバク」

「なんでもありません」

「……少年。そろそろ食べるのを止めてもいいと思う」

「ん？ 何で——まああれだけ食べればそうだよな」

草食恐竜の遺伝子の効果もあつてか、米や野菜までバクバク食べまくった結果、どうやら眠たくなってきたようだ。

「悪い、クー子、運んでやってくれないか？ ニヤル子だとコツソリ亡き者にとか考えそ
うだし、ハス太はとっくにダウンしてるし」

「信用!？」

「……おさ、分かった」

「だから長は辞めい」

「スルー!？」

「今なら視線を気にせずフォークを投げられるけど？」

「ゴメンナサイ、オツシヤルトオリデス」

生肉はタツパに入れ、冷凍庫に放り込む。

余り物もラップで包んで冷蔵庫に放り込み、焼いた肉はダウンから復帰したシャンタツ君に幾らかあげ、残りをニヤル子と2人で根性で胃に詰める。

ちなみに母さんは買い物で不在だ。

「うふ……食べ過ぎた」

「休んでる暇は無いです。今後どう対処するか決めなくては……おうふ」

「もどすなよ? 絶対もどすなよ!?! フリじゃないからな!?!」

「ゲロインになるつもりはないので……で、対処ですが、」

「あれ、お前らのことだから、強引に飼うとか言い出しそうなのに」

「そうしたいのは山々ですが……」

やはり成長後を考えると。

私の契約カプセルは5メートル程度が最大収納限界ですし、メタフィールドの拡張限界も精々30㎡ですし。

それに、劇中の時点での戦闘力が事実なら、我々3人の戦闘力では搦め手でも使わないととてもとても」

「ウソだろ、そんなバグった奴なのかよ……戦闘力?」

「宇宙インターネットで、映画の登場キャラの戦闘力を数値化しまくってる物好きな連中がいましたね。」

ゴジラ対ガメラとか、夢の対決を全部数値で処理したとドリーム^夢ブレイカー^{破壊者}とか言われてネットでは叩かれてるんですが、今回は助かりました」

「……まじかよ」

ソファアでクー子共々爆睡している銀髪を見る。

「……ドリームランドーは、本体ごとあっちに行く訳じゃないから無理か」

映画の中での暴れっぷりー

人の裏を平然とかき、罠を仕掛け、組み合わせられた遺伝子の元になった生物の能力を的確に使う程の知能を持ちながら、殺戮を楽しむ本能を持つ。

他の生命体に会わずに成長した結果として、自分の立ち位置を探っていたとも言われ

ていたけど……………

あの脅威は、本物だ。

……助ける事は、出来ないのか？

「…………ダメだ、頭がモヤモヤする。

僕も一眠りしよう」

「そうですね。では一緒のベットで

却下。熟睡するつもりは無いし、椅子こゝでいい」

身体を痛めちやいますよ!？」

「心が痛むよりマシだ。

じゃあ、みよんなことはするなよ？」

そのまま背もたれに体重を預けて目を瞑る。

今朝の睡眠不足もあつてか、すぐに睡魔が――

「—うん……ん?」

なにやら妙に暑い気が—

「真尋さん! やつと起きましたか!?!」

「うん………なあ!?!?」

目を覚まして真つ先に目に映ったのは、特撮で出てきそうな、真つ黒な衣装。

ニヤル子のフルフォースフォーム。

「おまつ、なんでそんな格好してるんだよ!?!」

「敵襲です！ あの子が狙われました!!」

「はあ!？」

慌ててリビングを見ると――

本気モードのクー子とハス太が、黒フードを被った奴と対峙していた。

その黒フードが右腕で抱えているのは、幼女化したインドミナスレックス。

左手には、拳銃。

「おやおや、やっとお目覚めか。

随分グツスリと寝てたねえ」

「その声……女だからって油断すると思うなよ!!」

ノーモーションでフォークを投げつけ――

「真尋さん、危ない!!」

ギインツ!!

「……………は？」

フオークが、弾き返された。

「あの敵、こっちの遠距離攻撃を、全部あぁやって跳ね返してくるんですよ」

「宇宙CCCは？」

「グレネード型のジャマーを放り込まれました！」

敵の足元を見ると、等間隔に引かれた横線の部分が点滅している、缶のような物体が転がっていた。

「くっ——」

「八坂真尋……………いい殺気だ。

やっぱり、私に脅威を感じさせてくれるのは、アンタみたいな奴だけらしいねえ。

クツケケケケケケケケ!!」

「? どう言う意味だ!？」

「さあ？」

さて、さて——

「また会おう!!」

バチンッ!

「?!?!」

黒フードが、その場で1回転したかと思うと――

そのまま消えた。

3話

side 真尋

「……ダメ。全然足取りが掴めなかったって」

「こつちも、しはんされてる宇宙CQCジャマーだったよ」

「むむむ………想像以上に手詰まりですね」

「マジか、お前らでもかよ……」

インドミナスを連れ去られた後――

クー子は惑星保護機構に犯人を聞き、

ハス太は件の手榴弾を調べたが、手掛かりは無かった。

「本当ですか、クー子？　ちゃんと調べたんでしょうね？」

「……入屋記録がある邪神全員の移動ログを確認してもらった。

引つかからなかったって事は、不法入屋者か――

アレも次元振動で迷い込んだか」

「でも、僕の名前知ってたんだぞ。

その説明はどうなる？」

「むう……問題はそこなんですよねえ……」

「……でも、その逆ならあった」

「「―逆？」」

シヤンタツ君も首を傾げる。

逆って、何が逆なんだ？

「……宇宙歴最大の戦死者を出した、『デストロイヤー戦争』

「ウツソ、アレって伝説じゃ無かったんですか!？」

ニヤル子がアホ毛を真上にピンと立てながら驚く。

「おい、なんだそのふざけた名前の戦争は？」

「……次元振動が、異世界へのゲートだと分かった一件。

文字通り、『デストロイヤー』が現れた」

「いやだからなんだよそれ？」

「……スターウォーズの、戦艦」

「……は？」

「つまり、想像上の存在が実在して、襲い掛かってきたって言う戦争なんですよ。

敵の規模こそデストロイヤー艦隻にソコソコの数のタイファイターのみでしたが、なにしろ相手が相手です……

兵装見たさに自滅しながら接近する奴、自ら捕虜になりに行く奴、ベイダーに会って

くると逝った奴。

最終的には、ヨグソトス率いる、原典で言う『外なる神』達がチリ一つ残さず殲滅した所為で証拠が残らず、伝説扱いされてるんです」

「

つまりアレか？

こつちが一方的に向こうを知ってた例があるから、その逆もあるってか？

「……そういう意味では、インドミナスレックスにも同じことが言える」

「……映画か」

……この状況―何気に今までで一番ピンチじゃないか？

今までは、結局のところニヤル子達のチートっぷりでゴリ押し出来たが、今度の相手は、その裏をかいてくるのだ。

「―取り返せ無い、のか……？」

「えっと、ちよつといい？」

さっきのしゆりゆうだん、分解したら、こんなのが出てきたんだけど……」

そう言いながらハス太が渡してきたのは、一枚のメモ用紙。

「ん？ ……なんだこれ？ 座標、か」

メモには、「南緯47.9 西経126.43」とだけあった。

……またあそこか。

「ニヤル子。どうやら向こうはこっちを呼んでるみたいだな」

「は……ここ、この座標は!？」

「……間違いない。」

「ルルイエ」

メモを見せただけで、察したようだ。

じゃあ、――出発だ。

――太平洋 海底 ルルイエ付近

何時ぞやと同じ様にネフレンⅡカーでルルイエに向かう。

ルーヒーの時とは違い、深き者ども達の迎撃こそないが――

アレ単騎での実力が桁違いだ。

目的はどうせくだらないだろうから考えないようにして、相手の戦力を測る。

クー子の予想が正しければ、相手はこちらの手札を全て知っている可能性がある。

しかも人質インドミナスというオマケまであるのだ。
悲観するなという方が難しいワケで――

「――さん。 真尋さん！」

「うお!! ニヤル子か、なんだよ?」

「だから、そんなに深く考えなくても良いですって。 きっとなんとかなりますよ!」

「……それもそうだな」

――いつも通り、こいつらの理不尽過ぎる暴力が相手を半殺しにして解決する。
きつと、大丈夫だ。

「――ところで真尋さん。 この戦いが終わったら結婚してくれませんか?」

「なぜ今死亡フラグを立てた!?!」

—ルルイエ

「……なあ、ニヤル子。」

確かルルイエって遊園地だよな？」

「……ええ」

「……じゃあ、あそこに見えるデカイビーカーの中身はなんだろうな？」

「……新しいアトラクション用の怪獣ですかね？」

「アハハハハハハハハハハハ」

「……少年、ニヤル子。現実を見よう」

「お前には言われたくねえ！」

何事もなくルルイエに侵入し、真つ先に目に入った物。

シロナガスクジラが入りそうなくらいデカイビーカーに入った、モノスゴク見覚えのある白くてデカイトカゲらしきモノ。

「随分と遅かったねえ。もう私の用事の9割は終わったよ」

ビーカーの陰から現れる黒フード。

「！ 見つけましたよ下主人！」

さあ、半殺しにされてさつき攫った子を返すか、全殺しにされて返すか、選びなさい
！」

「勝つ前提かい？」

クツケケケケケケケケケ!!」

黒フードはひとしきり嗤ったあと、無造作にビーカーを引きずり倒した。

「ほらよ。返す」

コピー？ クローンでも作って売りさばく気なのか？

「クケケ……」

私達に勝つたら、教えてやるよ」

「達？ 共犯者がいるのか？」

「ああ。 とっておきのな。」

「—だろう、インドミナス・レックス」

「「「「?!?!?」」」」

黄色の瞳が開かれる。

地響きを起こしながら、白く、堅い巨体が立ち上がる。

生え揃った爪と牙が顔を覗かせ、明確な死のイメージを敵対者に植え付ける。

「急激な成長に中枢神経が持たなくてな。目に映るモン全部敵だと思ってるから、正確には共犯者じゃねえな。唯のバケモンだ、三つ巴の戦いだ」

「おいおい……………」

おいおいおいおい!!

自分でも制御出来なくなるって分かってやったのかよ!!」

「制御……………」

クツケケケケケケケケ、クーツケケケケケケケケケケ!!

—制御?

制御不能な狩猛なる王
インドミナス・レックスを制御!!?

出来るわけねえだろうが!!

—ああおかしい! イイギャグセンしてるよ、ヤツベエ、笑いが止まんねエ。

ついでにテメエじゃア私も止められねエなアニヤル子オ!!」

ガキンツ!

ニヤル子が振り下ろしたボールを、腕一本で防ぐ。

「!? 気が付きましたか!」

「不意打ちくらいしか私を斃す手はねエからなア。

モチロン対策はバツチりに決まってるだろうがよオ!」

そのままボールがニヤル子ごと吹っ飛ばされる。

ボールは折れ、只の鉄棒となったが、ニヤル子は空中で回転して勢いを殺したようだ。

「ほら、ほおら。『反射』は切っというてやるから、さっさと来な。

でないと喰われるぞ?」

「—ガアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

白き竜の咆哮が響き渡る。

「さあ、最強のハイブリッド種よ！

今のお前のパワーで、あいつらをブチ殺してしまえ！」

巨大な爪が、叩きつけるようにして襲い掛かる。

「dooooooooor!?!」

「「「「……………ハア？」」」」

あの黒フードに。

「イデデ……やっべ、ひ、避難だあ!!」

「グルオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

「逃がすかああああああ!!」

慌ててその場から離れる黒フードと、それを追い掛けるインドミナスレックスと一瞬でフルフォースフォームに変わったニヤル子。

「ガアアアアアアアアアア!!」

「ちよ、だから、私はエサじゃないいいいいいい!!」

「腐☆腐。 お笑いだなあ!」

精々やるだけやって、仲良くインドミナス・レックスの腹の中にも行くんだなあ!」

インドミナスがターゲットをニヤル子を変えた隙に、黒フードが、鉄で覆われたジャイロスファイアのようなモノに乗り込む。

「!? テメエ!! クー子、ハス太!!」

「……とりやー」

「ふっ！」

「クケケケケ、無駄無駄無駄あ！」

その程度の攻撃では、改良版1人用ポッドを破壊することは出来ぬう!!」

本気モードのクー子とハス太の攻撃がジャイロスファイアモドキに炸裂し、そこそこの規模の爆音と閃光が発生する。

「……あー、2人とも。もう攻撃を辞めていいぞ」

「……でも少年、アレはまだ生きてる」

「大丈夫だ。あのバカ、たった今自分で死亡フラグ立てたから」

「………ああ」

「よし、じゃあさっさとおさらば

「グオオオオオオオオオオ!!」

!?!? まさかーや、ヤメロオ!!」

「ジャイロスフィアモドキはインドミナスに噛まれて、メキメキと異音をたて始める。ちよ、これマジでヤバイヤツ!」

あ、明日まで！ 明日までお待ち下s

『メギョツ!!』

マジで待ってええええええ!!?!?」

「逆に明日になったら潰されてもいいのかよ!?!」

邪神達の攻撃をくらい、傷一つ無かった球体が、メキメキ潰れて逝く。

黒フードも観念したのか、絶叫が止み、なにやら悟ったような事を口にし始めた。

「……やはりポッドは、圧倒的な力を持ったモノに潰されるSA☆DA☆MEなのか」

「分かってて死亡フラグ立てたのかよ!?!」

「だってわざと死亡フラグを立てると効果が反転して、むしろ生存フラグになるって聞いたんだモンキーパンチイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!?!」

グチャアア!!

悲鳴、異音と共に、遂にポッドが真つ平らになった。
で、そのポッドを啜えたまま回転、

「グオオオオオ——オオオオオオオ——

——グガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

ソオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

地平線の彼方の向こう側に吹っ飛ばされる——つて、

「ちよつと待て今の投擲音はどっから出た!?!」

「へ? 何かみよんなところありましたか?」

「……特に無かった」

「ああそうだな」

「よく聞こえるようにお前らの耳掃除してやろうか? フォークで」

「さあ、後はインドミナスだけです!!」

「……ボコれば戻りますかね?」

「お前らの本気モードと違って、成長でああなっちまったんだろ？」

「となると……クー子、例の薬は？」

「ん……はい」

「いやどつから出してんだよ!？」

クロスファイアシュークエンス状態で臀部まで大きく開いた背中の下の方から出したんだけど!？」

「そこスペースすらないよね?!」

「じゃあ、まずはコレを食べさせてみますか!　クー子、幾つか手に持って構えてなさい

!　アンタごとインドミナスに喰わせます!!」

「……ニヤル子、流石にそれは痛いじゃ済まない」

「ああ?　なに言ってるんですかんな事分かってますよついでにアンタごと亡き者にしようとしてるんですよ察して下さいよ」

「……二人共、喧嘩を辞めろ」

「ワアット?　ハス太あなたこんな脳味噌固形燃料の肩持つk」

ニヤル子とクー子すらフリーズする。

—ピイピイ！　ピイピイ！

「!?　このタイミングでか!」

「?　ハス太、なんだこの音?」

なんか胸元の辺りから聞こえるような……

「今回の敵、次元振動で現れた可能性を考え、その余震を察知して警報がなるアプリを i A i A P a d にインストールしておいたのだ」

「余震なんてあるのか?!」

「極僅かにだが。だから、次元振動の発生する場所は近いぞ!」

「……ていうか、アレがそうか?」

「」

ニヤル子とクー子の向かう先の景色が、突如歪む。

あまりに突然の事で、ニヤル子とクー子は止まり切れずそのまま入ってしまう。

「—ままよ!」

4話

side 真尋

—ここは、何処だ？

—確か、僕達はルルイエで……………

「……………なんでジャングルなんだよ。

そして暑っ!？」

—瞬で汗が吹き出してくる。

「……………このままじゃ熱中症待った無しだな。

ジャングルの道を歩いていく。

その前にニヤル子達と合流しないと」

……………それにしても、大きな道だな。

デコボコしてるから多分未整備だけど、その割には道幅が広くて歩き易いし—

「まひろくん！」

「！　ハス太！　無事だったか!?」

歩き始めると、すぐにハス太と合流出来た。

「よかった。　歪みからでたらいなかったから…」

「バラバラな所に飛ばされたみたいだな。　タイミング的にインドミナスも近くにいるとして、問題は先に飛び込んだニヤル子達だな。」

離れてないといいんだが……

「………ところで、ハス太は暑さとか大丈夫なのか？　汗かいてないけど」

「風をふかせてるからね、すずしいよ！　ちよつと待つててね」

すぐに少し強めの風が吹き始める。

……クー子とハス太がいれば、大体の環境でやっていけるよな。

少年邪神移動中

……

「…いないね」

「まあ、ジャングルに迷い込んだんだ。すれ違ってるかもしれないしな」

……しつかし、ここが地球上だと仮定して、何処なんだよここ。

環境問題が騒がれてる僕達の世界の地球でこんなな鬱蒼としたジャングルとなると、それこそ赤道直下の大陸とか、その辺りが殆どだ。

そしてその大半のジャングルが、恐ろしいほど広い。

……下手したら、もうこのまま人に会えないかもしれないな。

「ま、まひろくん……」

「? どうした、ハス太？」

「な、何か、きこえない？」

「?」

耳をすませてみると――

鳥のさえずり、何か羽ばたく音、地響きの様な足音、水の流れる音、――

……足音？

――ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド――

「……」

「ちか付いて……きてるね」

「……来てるといふより、もう目の前じゃん!？」

咄嗟にハス太の手を引いて、近くの大木の陰に隠れる。

そのすぐ横を通り抜けたのは、――

「あれって、ーガリミムス!？」

「映画で見たまんまだな!？」

1、2、4で出て来た、群れで行動する草食恐竜ーガリミムスだった。

……ついでに、その内の一頭にしがみついている白い物体と紅い物体があったが、スルーした。

「ーまつひろさん!! 会いたかった

「思いつきり楽しんでたよな? 恐竜ライド」

……探索の幅を広げる為でしt」

「クー子」

「捕まえるためにわざわざ生体時間加速クロックアップしていた」

「」

いつもなら、フォークを刺すタイミングだけど――

……………偶には、見逃してもいいか。

「……………少年、途中で凄いものを見つけた」

「凄いもの?」

「ああ!? 私が報告するはずだったのに!」

「……………早い者勝ち」

「で、結局何なんだよ?」

話がズレそうだったので強引に戻す。

「それはですね……………」

ービジターセンターです！ ジュラシックパーク跡の！
「……………はあああああ
!?!?」

ービジターセンター跡 内部

……………屋根も扉も、建物の大半が倒壊してるけど……………

あの特徴的な、ラプトルの絵が描かれた壁は無事だった。

「ていう事は、ここはイスラ・ヌブラル……………」

「それも倒壊の具合からいって、劇中でインドミナス・レックスがぶち壊していった後みたいですね。」

「ぺちゃんこになってましたが、ジュラシックパークのマーク付きのジープがありましたよ」

「……次元振動………本当に異世界へのゲートだったのかよ。」

「ちよつとまつて！　ここが映画のせかいだとして、じゃあ今は『いつ』なの!?」
「……確かに、気になる。」

「ぱつと見こも壊れたてに見えるから、本当に直後なら、劇中のインドミナスレックス
スは勿論、翼竜にも気をつけなくちゃいけない。」

「事後ならテイラノサウルスとヴェロキラプトル、それに作中に出てこなかった肉食恐
竜も危険」

「それに、脱出も問題ですね。」

「都合良く私達の世界への次元振動が起きれば話は別ですが、期待は出来ませんし……
事後なら救出される可能性は低いですし、本来パークにいない人がいるのがバレれば
面倒です。　結果も効果があるか分かりませんし」

「……つまり、ベストなのは帰り道が発生する事。　ベターで劇中の脱出船に潜り込む、
か」

中々ハードだな。　そもそも、今が『いつ』かによつては後者の選択肢は取れないし。

「おやおや真尋さん。　もう一つクリア条件を忘れてますよ？」

「忘れてねえよ。」

―取り返すぞ。　僕達の世界のインドミナスを―

「―それで、いの一番に確認しなければならないのは、今現在の時間です。　1番手つ取り早いのは、原作主人公であるあの兄弟かカップルと合流することですが……

必然的にインドミナスとの接触が困難になります―

「……なら、島の南側の避難エリアの様子を伺えばいい。　人が大勢いれば、まだ時間の猶予はある。」

原作インドミナスの行動予測も―

「……？ どうしたクー子？」

台詞の途中で突然フリーズする。

まさか、近くになにかいるのか!?

「……出来ない」

「？ ハッキリしなさいよクー子。 モササウルスのエサにしますよ？」

「……原作インドミナスの行動予測が、出来ない」

「……？ だいたい映画どうりにうごくんじやー」

「……劇中でも、翼竜ドームを破壊した後は、ラプトルの狩りのシーンまで一度も描写がなかった。」

つまり、昼から夜までの間は、いつ、どこに居るかが分からない」

つ、つまり――

「次の瞬間に、頭からバツクリ逝かれるかもしれないということですか……」

「だからフラグを立てるなあ!!」

「フラグとはへし折るモノです！ その為には敢えてフラグを乱立――」

「――グルルルルルルルルル」

「

」

「……………へし折ってこいよ、死亡フラグ」

「ムリdeath」

目の前の木々の隙間からインドミナス・レックスがコンニチワ。

「ーガアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「逃げるぞ!!」

「あれが僕らのインドミナスのかのうせいは!?!」

「どうやって見分けるんだよ!?!」

全力で走る。

…………でも確かにハス太の言う通り、見分ける方法を探さないとー

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「ぎゃあ!? い、いつの間に前に!？」

「先回りされたのかよ!？」

気がつけば、いきなりインドミナス・レックスが目の前に――

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「

「:／＼ (^o^)/」

「／＼ (^o^)/」

「お前からどうやって発音した?!」

前からも後ろからもインドミナス・レックス。

…
…
詰んだ
?!?!

第5話

side 真尋

「——グルオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「ギヤアアアアアアアア!?!」

2頭のインドミナスレックスの咆哮が響き渡り、殺戮衝動全開の怪獣決戦が始まる。

「でんじやーっ!!」

「おわ、あ、あぶ、ああ、あつぶねえっ!!」

払われた尻尾をなんとか躲して、走って逃げ出す。

「ぜえ、ぜえ、ま、待ってください、真尋さ〜くん。私、もう体力が、」

「は?! 何時ものチート体力はどうしたんだよ?!」

「1年間もぶっとおしで逃げてちゃ、そりや疲れもしますよおていぬすっ?!」

「メタいわあ!! うおっ?!」

息絶え絶えなニヤル子に振り返ってツツコんだ瞬間、横方向にすっ転ばされる。

「イツツツツ……」

い、一体何が………」

「……少年、静かに。ここも安全じゃない」

「クー子!? おま、何やって——」

……ホントに何ヤツてるんだよ」

転んだ時にダウンしたのか、微妙に抵抗力の弱いニヤル子のスカートに、頭から突っ込んでる変態クー子を冷めた目で見る。

「……何って、人工呼吸」

「代わりにアンタの息を永遠に止めてやりましょうか!？」

両足でクー子の首をロック、180度回転させて地面に捻り込み、反動で跳ね起きるという無駄に高度な無駄な技術を使った技が決まる。

「全く、油断も隙も無いですね。」

……まあ、私と真尋さんを救ってくれた恩に、すこ〜すこ〜しだけ手加減しましたけど」

「ええ……（ドン引き）」

どう見てもオーバーキルな惨状に目を逸らすと、足元、ズボンの裾に赤いボールの様な何かがかくつついてることに気がつく。

これって……クー子の遠距離攻撃武器（名前忘れた）だよな？ いきなり足が纏れたと思つたら、こいつが原因だったのか。こんな所で座り込んでられるのも、大木の裏側に転がり込んだからか。

……まあ、ここだっていつまでも安全つてわけじゃない。10メートルクラスの大型がガチ戦闘してるわけだから、それこそ今すぐにでも逃げないと。

「あ、ところでハス太ってどうした？」

瞬間、踏みつけるニヤル子と悶えるクー子の動きがピタつと止まる。

「……………おい」

「な、ナニヲイツテルノカ、ワタシニハサツパリ」

「……邪神がそんな簡単にやられると思う？」

「声が震えてるぞ。それに勝てねえって断言したのお前らじゃねえか」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………ほ、ほら！ 友情、努力、勝利っていうじゃないですか！」

「いつからここはジャ○プの世界線になった思いつきりユニ○ーサルだろうが。それに僕、お前らが努力する所一度も見えたことないんだけど」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………殺られた所は見えてないんで。多分、きつと、メイビー、生きてるじゃないかと、

うん、大丈夫デスヨ……………」

「うおおおい!?!」

ニヤル子の肩を掴んでガックガクに揺さぶる。

「そ、そもそも！ そりゃあんなテイラノと何処ぞの傘製BOWをフュージョンさせたようなヤツ相手に1年も鬼ごっこさせるうP主が全ての元凶ですよ?! そりゃひっそりと逝きもしますよてか1年ですよ、1年?! 放置し過ぎなんですよ!!」

「それには全面的に同意するが、お前らなら幾らでもやりようがあつたらうが?! シャンタツ君で上に逃げるとか!」

「カプセルにしまつちやつたんで、また出すとなると数瞬無防備になるんですよ！ その間にパツクリ逝かれてジ・エンドです！ それに上がったら上がったで翼竜が飛んでるんでカプコンヘリの二の舞になります!」

「そういえばそうだったアッつッ?!!?!」

バキイツ、という音と共に、僕らが隠れていた大木が頭上スレスレでヘシ折れ、インドミナス(2)が吹っ飛んで来る。

「グルルルルル………」

……メトメガアウー

「あ、あはは………」

「グルオア!？」

突如、背後のインドミナス（1）の顔面で爆発が起きて、その巨体を地に叩きつける。突進を強制キャンセルするだけの爆発に怯み、

『——邪魔だ、デカブツっ!!』

「グギアアアアアアアアアア!?!？」

見覚えのある、青と黒の頑丈そうなジープがそのドテツ腹に激突する。

これには堪らずインドミナス（2）は逃げ出し、先に倒されていたインドミナス（1）もその場から慌てて逃げて行く。

「……た、助かったのか……?？」

呆然としてみると、ジープの運転席と助手席の扉が開く。

運転席側はベストやショットガンで完全装備で、ヘルメットで顔は見えないけど、助手席側から出てきたのは——

「——まひろくん！ ニヤル子ちゃん！ クー子ちゃん！」

「ハス太!? あんた無事だったんですか?!」

「うん! にげまわってたらこの人にバツタリあつて、そのまま恐竜をおいはらえる隙をまっつてたんだよ」

「それならそうとハヨ言わんかい!」

ニヤル子とハス太のいつも通りのやりとりをみて、ようやく落ち着ける。

「よ、よかった……」

「疲れてる所悪いが、いいか?」

「え、あ、はい」

座り込んでいたままだった僕に手を伸ばすヘルメットの人に助け起こされると、その細部に編まれた、”ティラノ骨格のマーク”が見える。

「——ジュラシック・ワールド警備部、ロバート・マルドゥーンだ。

アンタたちが谷に残ってた客で合ってるな?」

武骨なショットガンをスリングで下げたその人がヘルメットを外すと、3、40代くらいのオッサンの顔が映る。

「えっと、ハイ」

「ならいい。先に車に乗っている」

そういつて背を叩くと、インドミナスが大暴れしていた方へ歩いていく。

……それにしても、あいつら、妙に静かな気がするな。

具体的には、ニヤル子とクー子がフリーズしてる。

「おい、どうした?」

「ばんな、そかな、」

「ああうん、話する気ないなお前。」

クー子、そっちはどうだ?」

「……ロバート・マルドゥーン。」

ジュラシック・パークのラプトルの飼育員」

「は? ラプトル? オウエンさんじゃないのか?」

「……少年。私は、『ジュラシック・パーク』って言った」

「いやだか、ら——」

そこまで言われて、あるワンシーンが脳裏に浮かぶ。

—— 枯れ木の上にテンガロンハットを置き、それを囿にする男性。

—— ゆつくりと軍用シヨットガンのストックを展開、頬付けして保持するも、真横から顔を覗かせるラプトル。

—— 『C l e v e r ^賢 g i r l ^奴』 ——

思い出した。

マルドゥーンって、

「^パ1作^ク目のキャラ?! なんて⁴ワ^作ールド^目に、待て、そもそも死んだんじや、」
「それは映画限定の話です」

いつの間に復活したニヤル子が話を引き継ぐ。

「映画限定の話？ どういう事だ？」

「映画版だとマルドゥーンはラプトルにサクツと殺られるチョイ役ですが、小説版、及びゲーム版シナリオだと生存組ですよ。例のラプトルのシーンも、小説版ではフツに撃退に成功してますし、ロケランとジープと麻酔銃でグランド博士初代人公に襲い掛かるテイラノを薙ぎ倒した挙句、一度は眠らせることに成功している、作中唯一といつてもいい公式戦力チートキャラです」

「尚更なんでこんな所に?!」

よく思い出せば、抱えてたショットガン1作目と同じだし。あの特徴的な折り畳みストックは見ればわかる。

「……助けてくれたのは事実。生存していてもおかしくないならそれでいい。幸い、向こうは私たちをゲストと勘違いしてるから、そこを利用しよう」

取り敢えずの方針を決めた僕らは、言われた通り、ジープに乗り込むことにした。

——しばらくして、深い熱帯の森をジープが走破する。

森を抜けると、舗装された道が姿を現し、閑散とした建造物群が見える。

すぐ側には、円錐状の茶色い屋根の、ワールド版ビクターセンター。

「よし、ここまで来れば大丈夫だ。」

後はセンター内の連中に言えば避難域まで逃げられる」

そう言つて僕らを降ろすと、「じゃ、うまくやれよ」とだけ告げて、さつさと何処かへ走りさつてしまう。

「——さてと。これからどうする?」

現在時刻は大体分かった。余程のことがない限り、少なくとも船に乗り遅れることはないだろう。脱出手段は確保済み。

とすると、

「そりやもちろん、インドミナスを追いますよ。ちようどいい事にそこらじゆうにバギーが乗り捨てられてますし。

というわけでハス太、クー子を乗せてそつちのを使いなさい。私はこつちを使いませう」

所々赤いものがごびりついてる青い四輪バギーを2台手早く調達すると、キーも無いのに針金一本でエンジンをつける。

「さあ真尋さん! トバしますから捕まってください! 具体的には私のバストを!」
「だ、そうだクー子」

「流石少年。分かってる」

「ギャース?! 熱い熱い焼ける溶ける!!」

乳練り合ってる2人を放置して、付属品らしい無線機と睨めっこしているハス太のいる方のバギーに跨る。

「あ、まひろくん!」

「どうだ、何か分かりそうか?」

「うーん。それが、インジエン社の、”危機管理部門”のひとたちの無線をきいたら、インドミナスがセクター5に入ってからのはんのがないんだって」

「てことは、そのエリアにいるってことだよな」

リゾートエリアに来る途中、マルドゥーンさんから聞いた話によると、ジュラシツクワールド内での恐竜の管理に使われている電磁フェンスは、本体に埋め込まれた発信機が一定区画ごとを囲ったセンサーに反応することで電気ショックを引き起こすことで機能すること。

これを利用すれば、その範囲の出入りであれば発信機無しでも追跡出来るらしい。

だからこそ、管制室でもある程度インドミナスを追えたのか。その結果が
マストラニの退場
カブコンヘリなわけで。

「……ところでさ。」

セクター5つて、何処？」

「……………あ」

「マルドゥーンさーん！ 地図！ 地図置いてってええええええええ!!」

当然の如くそんな絶叫が届く筈もなく、虚しくそよ風が吹くだけだった。

「しょうがないですねえ真尋さんは。 地図がないと何も出来ないんですか？」

「……マップの暗記は鉄則中の鉄則」

「黙らっしゃいゲーム脳。 そんな言うなら先行けオラ」

「分かりましたよ。 ほらクー子、端末出しなさい」

「……ニヤル子のは？」

「使い過ぎで電池がボンバーしました」

渋々と、クー子がスカートからスマホ——ではなく、なぜかゲームコントローラーを

取り出し、無線機に繋ぐ。

「……コマンドなんだっけ？」

「はあ？ 覚えときなさいよそのくらい！ 上上下下左右左右四角三角ですよ！」

「だからユニバー〇ルだっつってんだろなんでコ〇ミコマンドなんだよ!」

『ナビゲートを開始します』

「しかも元ネタより進化してるうううううう?!」

無線機特有のノイズ混じりではなく、メツチャ流暢なゆつくりボイスが機械から流れて、案内が始まる。

ええ……こんなんでいいの??

——ナビゲートに従い、森をバギーで突き進む。

にしても、何時ぞやの縞瑪瑙の城でも思ったけど、僕らの世界の宇宙技術は一体どうなってるのだろう。

機械のクセして、『3分前を通り過ぎた所を右です』て。しかもフォークで脅すと修

正版でナビを始めるし。なんでそこまでフォークが効くんだよ。

『間も無く、目的地付近です。 ルートガイドを終了します』

すぐそこに、白字で『5』と書かれた、小さな摺鉢状の機械がビッシリ張り付いた、青い支柱がそびえ立っているのが見える。

日はもう陰り、暗くなり始めている。 リゾートエリアの惨状を考えれば、とつくの昔にラプトルを解き放つ準備は始まっているはず。 時間が、無い。

「急ぐぞ、ニャル子！」

「分かっています！ フルスロットルウ!!」

第6話

side 真尋

「…………おらおらー」

「ヒイヤツハアアアア!!」

——バカ2人が目立つように（わざとだよな？ テンションの所為じゃないよな??）、奇声をあげ、エンジン音をけたたましく鳴らしながら爆走する。

音に怯えたらしいコンピーが逃げていくのを尻目に、思った以上揺れない車上から周囲を警戒する。

あのバカ共がああの調子になってから、かれこれももう5分は経つのに、未だインドミナスは姿を見せない。

「まひろくん、そろそろまずいよ。 まっくらになっちゃう……!」

「ああ。 なにか、 なにか手は——」

熱帯の気候の影響か、熱にやられたように頭が働かない。
くそ、このままじゃ、本当に、——

ブシャツ

……? なんだ、この鉄っぽい匂い?

気になって、思わず匂いの漂ってくる方を見ると、

「……………ニヤル子、ニヤル子オ……………」ドクツドクツ

「ギイヤアアアア!! ど、何処になに突っ込んでるんですか?!
つかあつつ!? ア

ンタ体温どうなってるんですか?! え?!? クトウグアって自分の熱は平気なのに他所の熱ではフツーに熱中症になったりするんですか?! なんてハタ迷惑な!!」

首の所からガツツリ両手を服の中の前面に突っ込んだクー子が、鼻血でバギーをニャル子ごと塗装しながら力無く項垂れている。

その声に覇気はなく（普段から無いけど）、目も何処か虚ろだ。

「おいしい?! 一旦止めろ、匂いでヤバイのが寄って来たら、どうす、る……………」

…………アレ? 僕らって今まさに、そのヤバイのを探していたんじや——

——ズシン——

わずかに、重いモノが地に落ちたような音が聞こえる。
バギーから鼻血が滴るテンポが、一瞬だけ、早くなる。

「ま、真尋さん……」

「……ニャル子、手榴弾のピン抜いとけ。ハス太、クー子の看病頼む」
抑え込むにしろ、撃退するにしろ、単純な火力ならニャル子を上回るクー子のダウンは痛い。

そう考えて指示を出す間にも、少しずつ足音は大きくなる。

真っ先に匂いに寄りそうな腐肉食生物が居ないことが、ソレが、聞き違いでないことを証明する。

——ズシン

—
ズ
シ
ン
!!!
—

—
ズ
シ
ン
!!
—

—
ズ
シ
ン
!
—

「グルルルルルル………フウウウ………」

ついに、足跡のヌシが姿を見せる。

血の匂いの元であるクー子を視界に収め、匂いを確かめるように鼻で一呼吸置き、咆哮する。

「——ゴオアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「オツリイヤアアアアアアアアアアアアアア!!」

咆哮した隙に放られた冒流的な手榴弾は、的確に足元を爆破。僅かに怯む。

「はっはー! 流石に最大威力なら通用しますか!! おらもう一丁!!」

「おいニヤル子!? それはやり過ぎだ!!」

好機と見たのか、盛大な数投げられた手榴弾は、

「グルッ！」

ブンッ！ ↑前足を振る音。

コンッ！ ↑手榴弾が弾き返された音。

「……………あ……………」

ちゅどーーん！

跳ね返された手榴弾が目の前で派手に爆発する。

……………ん？ その割には、ダメージの無いような？

「——ふ、ふうふう。 間一髪でした……」

「おいニヤル子？ どういう意味だ？」

「ギリギリで宇宙CCCをワザとファンブらせることに成功したんですよ！

……………まあ手持ちの冒流的な手榴弾、あれで全部だったんですけど」

「おいしいおいしい?!」

そ、そうだ！ 前に使ってたRPGはロケランどうした?!」

劇中でもロケランで転倒させているし、爆発を受けて逃げるところを生で見ている。

宇宙の謎技術が混ざったロケランなら——

「あー……………大変申し上げにくいのですが、あのロケランは事前許可の支給制でして。

それに私、最初のルレイエでの一件で、『冒流的な手榴弾は私の数ある宇宙CCCの中でも随一の威力』と言った気が……………」

「なん……………だと……………?!」

そんな、まさか、うそだ、——

「——その通り。また会ったな、八坂真尋っ！」

「グルウアアアアツツ?!」

突如、インドミナスの足が黒い沼に嵌り、身動きが出来なくなる。
いや、それ以前に、この声、は、——

「——ニヨグ太、だと?!」

「そのとおおり!!」

沼の一部が盛り上がり、見覚えのある人影になる。

ウソだろ?! だってアイツは、イースの連中に囚われてるんじゃない、

「ふはははははは! 幾ら高等技術を持っていようが、所詮菌は菌! この俺を捉え続け

る事など出来ぬ!

それどころか、再度コイツを奪われる程のマヌケだったな!」

コイツ、を強調したタイミングで抜いたのは、これまた見覚えのある拳銃型の機械。
「……ニヨグ太? ま、どうでもいいです。

それより、なんでアンタみたいなポツと出モブが、そんなモノ^{ハイパーイース}なんて持つてるんですか!？」

「拾った」

「ウツソだろお前?!」

確かに『テキトーなトコにポイするですよ』とは言つてたけど!!

前科持ちがあっさり見つけるような所に置くとかあり得ないだろ?!?

「だ、だとしても! なんでお前がこんな場所にいるんだよ?!」

「よくそ聞いたな! あの一件の後、宇○ユープに戻った俺に居場所はなかった。クビにされたのだ!!」

惑星メー○ルみたいに潰れば良かったのに。 あんな人を機械に組み込もうとする会社。

「だから私は復讐を誓った!!」

具体的には、宇ー〇ユープとミゴミゴ動画の再生数1位を獲得する事で」

「メッツチャ平和的だなオイ」

「だが、壁として立ち塞がったのは、動画のネタが無い事だ。

悩む傍、手慰みにハイパーイースを弄っていたら、見つけてしまったのだよ。 そう

——意図的に次元振動を引き起こす機能をなあ!!」

「なっ?!?」

つまり、あれを奪い取れば、帰れるって事だよな!?

「もつとも、未知のエネルギーを相当量使うようで、もう帰りの分しか残ってないが、まあそれはいい。」

肝心なのは、この世界だ!」

捉えられ、未だもがいているインドミナスを指し、高らかに言う。

「——こいつら、『ジジュラシック・パーク』シリーズの恐竜を捉え、俺の手で究極のパークを創り上げ、動画を撮る!! そして俺をクビにした経営陣の悔しそうな顔を肴に美味

い麻婆を食って愉悅る!!

既に試験で異世界の物体を持ち帰れるのは確認済みだからな!」

「ソーナノカー」

うん、セリフの端々から何処に逝ったのか察せたよ。お前もある意味被害者だったんだな。

「ふははは、ふう。

最早貴様らなぞどうでもいい。そうやって指を啜えて見ていればいい!」

「ハッ! 状況が分かってないのはアンタですよ。もういつペン校庭に埋めてやりましようか?!」

「バツチり覚えてんじゃねえか!!

だが、俺はあの時とはもう違う。貴様らでは麻婆の力を取り入れた俺には勝てない!!
ぬおおおおおおおおお……!」

ゴゴゴゴゴと地響きが鳴り、ニョグ太の身体が人の形を保ったまま肥大化する。

「麻婆ってなんだよサ○ヤ人の血か核物質かよ?!」

「少なくともどつかの泥よりかは力が高まる、溢れるう!!!」

「帰れ本気狩ル☆キチガイ!!」

ガチムチ化した変態が外見に似合わないスピードで距離を詰め、拳を突き出すのを、ニヤル子がバールの二刀流で受け止める、が。

「ムダア!!」

「チッ!」

一撃で2本とも木っ端微塵になり、ダメージこそなさそうでもニヤル子が押される。

「ハス太ツ!! クー子はまだか!」

「…………ハス太?」

フォークは刺さるもダメージが余り通ってないようで、それでも援護射撃しながら声をかけるも、返事が返ってこない。

気になって後ろを見れば、

「…………そうか。あの世界線に妙な跡があったと思ったら、テメエかゴルウア……………」

「!!」

「!?!」

指をゴキゴキ鳴らす、インドミナスに潰されたハズの邪神がいた。

その後ろには、半透明な、結界のような空間に閉じ込められたハス太とクー子が。

「——?! クッ、」

「安心しろ、ニヤルラトホテプ。私の狙いはそのバカだけだ。

………覚悟は、いいな？」

フツと、虚空から現れた刀を握る。

「……クソツッ！」

流星に己の不利を悟ったのか、慌てて下がりながらハイパーイースの銃口を——僕に向ける。

「——ツ?!」

「真尋さん!!」

「——死ねい！」

撃ち出されたエネルギー弾をニヤル子が急いで打ち返し——
そのまま、動かなくなってしまう。

「?!? にゃ、ニヤル子?!」

「落ち着け。ただの時間停止だ」

邪神が足元の影から飛び出してきた古い銃でニヤル子を撃つと、

「——りやあ!! つと、真尋さん?」

「よ、良かった、助かった。」

「……………その、ありがとな」

「いえいえ。夫を守るのは妻の仕事ですし」

「……………お前には言っておねえよ」

隣を見ると、いつの間にか邪神は消えていた。

ついでにインドミナスを捉えていたニヨグ太の『タタールの黒き拳』も。

インドミナス本人（人?）は、僕らと会おうと酷い目にあうと思ったのか、イライラした様子で逃げてった。

「……………そうとう、面倒なことになっちゃいましたね。あのインドミナス、背中に抉った

ような痕がありました」

「てことは、本編の個体か」

「ええ。そして、あちらを見てください」

ニヤル子が深刻な表情を向ける先に目をやれば、薄く煙が立ち上がっている。耳を澄ませると——銃声と、悲鳴のようなモノも。

「——ラプトルが、解放されてしまったようです」

第7話

side 真尋

クー子とハス太を回収して、エンジン音のしないようシヤンタツ君で移動する。

不慣れなジャングルをバギーで進むのは危険だし、匂いを追う事も出来るから、一気に便利になった（相変わらず耳栓必須だけど）。

「なんで最初からシヤンタツ君使わなかったんだよ?」

「インドミナス2頭ですらヤバイのに、象並みの大きさのUMAがいきなり出てきたらマズイですよ。見られたらどうするんですか?」

「なるほどな。」

「で本音は?」

「ぶつちやけ思いつきませんでしとあなとす?!」

ちつ、避けたか。

「……ニヤル子、シヤンタツ君が追ってる匂いは、本当にこっちに来てたインドミナスで

あつてる?」

「大丈夫ですよ。あらかじめ幸運で振っておいたら成功しましたから!」

「おいホントに大丈夫なのかそれ?」

不安になつてきた。やはり多少の無茶はしてでも二手に分かれるべきだったか?

「だいじょうぶだよ!

きつと、すぐに会えるよ!」

「……そう、だな。」

それより、暴走してるあいつを戻してやる方法を考えないとな」

ニヤル子に会つてからの発言を思い出せる限りで洗い出す。

どこか、伏線のようなポイントは――

「ギギギギギギ?!」

「うお?!」

急にシヤンタツ君がその足を止める。

何事かと前を見れば、暗闇の中に佇む、白い巨体が、

インドミナス・レックスが。

▽あつ！
???の インドミナス があらわれた！

ちよつと待て。

「なんでポケモン?!」

「モンスターを捕獲するとしたらやつぱりポケモン風でしょ!」

「でもモンスターボールのパチモンの契約カプセルにはあいつ入りきらないんだろ?」

「……………」

「……少年、君のような察しの良いガキは嫌い」

「うるせえハヨ直せ」

「…………ぶーぶー」

視界の下の方に映っていた文字列が消えた。こいつも律儀に待っているのか、未だ

襲ってくるような様子はない。

「しっかし、実際問題どうしますか? ゴリ押しは無理がありますし」

「……急なことだったから、例の薬も数が無い」

それだよなあ。 何をするにしても、手がなすぎ過ぎる。

「…………しようがない。 取り敢えず、」

動きを封じよう、と言おうとしたタイミングで、インドミナスが動き始める。

でもその動きは、非常にゆっくりとしたものだった。

「? やけに鈍い———というか、殺気が薄いですね?」

るもんだと思つてたら、まさかのちゃんとした(？)伏線があったよ?! アレか? 1年前のプロットとつといてたのかよ?! まどマギやら東方やらで根刮ぎ吹っ飛んでるもんだと思つてたぞ!?

「真尋さんメタい! メタいです!!」

例えクソザコうp主が最新作ブームに乗つかつて投稿↓他作への宣伝を計画しているようなクズでもそれは考えちゃダメです!!」

「お前の方が罵詈雑言吐いてね? つかぶつちやけ乗り遅れてるよね?!」

「それもいっちゃいけないよ! 泣いてるひとだつているんだよ!」

「「あ」」

「グルルルル……」

まだビビってる様子のインドミナスに向き直る。

所々焼けていたり、弾痕があるけれど、あまりダメージは受けてないみたいだな。

「よーし! こうなつたら、後はニヨグ太をブチ転がしてハイパーイースをゴウ・ダーツすれば万事解決ですな!」

「だな。で、どうやって追う?」

「船での脱出が不要になった以上、制限時間は無いに等しいです。さらにニヨグ太が無茶な原作介入をしない限り、インドミナスレックスはここにいる1体のみ。十中八九襲撃があるハズです。つまり、探さなくても向こうからノコノコやってきたところを踏みつけて谷に蹴り込めばおkです!!」

「それノコノコ違い、それじゃ亀だ。」

「……ところでさ、あの邪神、ニヨグ太を殺しにかかったじゃん?」

「ええ。そのうちガチギレして『ゲート・オブ・ヴァビロンツツ!!』とか叫びそうなレベルでしたね」

「何故にAUO?」

「で、ソイツ。ハイパーイースごとグシャつと殺つちやう可能性は?」

「今すぐ探しましょうマツハで行きましょう寧ろ制限時間縮まってたああああああ!!」

グルンツ! とシャンタツ君が方向転換して、がむしやらに走り始める。

理性が戻ったインドミナスも、後ろからついてくる。

「おい!!? アテはあるのか?!!」

「はい!!」

時間帯的に、ガチでパークを丸パークするならシステムとか遺伝データを盗む為に、ピジターセンター内に潜入している可能性が高いです! あそこはホスキンスがブルー

に殺られてからインドミナスがモササウルスに喰われるまではコントロールルームにメガネのオツサンが1人いるだけで、しかもそれ以降は無人になります。これ以上ない絶好のチャンスです！」

な、なるほど——って、ちよつとまで?!

「それだと原作勢とバツタリ会っちゃうんじゃないか?!

インドミナスを連れてたらヤバイだろ!? 特にテイラノ!!

「だから、ワンチャンに賭けます!!

着くのが、戦闘終了後、尚且つニヨグ太の目的が終わる前であると!!」

「む、無茶苦茶だ!」

でも、そうは言っても、もうその奇跡を信じるしか、

「あ、真尋さんは奇跡とか魔法とか願わないで下さいね。フラグになるので」

「お前らじゃあるまいしやるかあ!!!」

第8話

side 真尋

ズシン、ズシンと大地を揺るがす足音をBGMに、もう何度目かの森を抜ける。

ま、僕はシャンタツ君の上に座ってただけだけど。

「——まひろくん、できたよ！」

「……手の届く範囲は。歩きながらだと足周りは無理」

「ま、小細工ですらない悪足掻きみたいなものだ。あれだけでも上出来だよ」

この2人には、インドミナスの応急手当を頼んでおいた。

具体的な怪我は、マルドワークさんがジープで体当たりしたのと、インジェンの部隊のロケランのダメージが頭部と左脚に、同じくインジェン部隊+ α に撃たれた銃創が多数。

分かってもらえたと思うけれど、原作でラプトルと会話したのはこっちのインドミナスだった。まあ、動くモノ \parallel 敵 \circ r餌な原作インドミナスが、言葉が通用するとはいえラプトルと会話した理由に納得がいったよ。

それで、治療を頼んだ理由としては、

——GOA A A A A A A A A A A a a a a a a a——

「ひっ?!」

「……大丈夫。 遠い」

さつきからちよくちよく轟く、どこまでも響きそうな咆哮。
テイラノサウルスの声が聞こえるからだ。

恐らく、いや確実に、あの ” 楽園の女王 ” とは戦うことになるだろう。

「……おい、ニヤル子。 あれ」

「ええ。 ビジターセンターの屋根ですね」

赤々と照らされた夜空に、藁製つぼくみえる屋根が浮かぶ。

「——さて、クライマックスといきましょう!!」

——ビジターセンター前

扉のサイズ的に入れそうにないインドミナスとシャンタツ君から降りる。

もう既に原作イベントは片付いた後のようで、所々建物は崩壊、火を吹いていて、モササウルスのいる湖を囲う柵は破壊され、その部分だけ僅かに湿っている。

……数時間前も既に惨状だったけど、これじゃ完全な地獄だな。

「レクシイとブルーは……いないようですね」

「よ、よかったあ。あの2ひきとはたたかいたくないもんね！」

「それには同意だな」

辺りを警戒するクー子たちの言葉に同意して、ビジターセンターを見据える。

……にしても、色々とボロボロだな。

あの窓のガラス割れとか、翼竜が突っ込んだのか——ん??

なんだ？ 今窓の方で、チラツと赤い光が見えた気が……？

「それじゃ、突撃します、よ……？」

「？ ニヤル子？」

猛つていたニヤル子が、突然僕の胸の1点を指先でトントン突く。

その部分を見ると、小刻みに震える、小さな赤い点が。

これって、……レーザーポインター??
 なんでこんなモノが――

――POROROROROROROR!!

「?」

なんの音だ、と口を開きかけて、

扉を破壊する勢いで黒いカゲが飛び出して、襲いかかってくる???

「GISYAAAAaaaaa!!」

「ギヤアアアアア?!?! ちょ、これシヤレになりません!! ヘルプ! ヘルプ!!」

丁度間にいたニヤル子を押し倒し、噛みつきこうとするのをバールで防いでいる。

異様に長い手足で引つ掻こうとするのをクネクネ、割とガチでキモい動きで避けるニヤル子に覆い被さる『ソレ』は、見たことのない、

悪魔のような、竜。

「こ、コイツは、一体、」

「——また会ったな、八坂真尋オ……!」

呻くような声が聞こえるセンター方向に振り向けば、満身創痍と言った具合のニヨグ太が。

そしてその手には、レーザーポインターの取り付けられたハイパーイースが。

「ニヨグ太?!」

「クツクツク……無様だなあ、ニヤル子オ!! もう逃がさん!! 確実に息の根を止めてくれるわあ!!!」

ニヨグ太がニヤル子に照準を向け、横に飛び出たボタンを押すと、さつきと同じ、甲高い機械音が鳴る。

それを合図とするように、黒い恐竜が一層力を込める。

「ふは、ふはははははあ!!」

「おいニヨグ太！ なんなんだ、コイツは?!」

「ふ、なんだかんだと聞かれたら、応えてあげるが世の情け!!」

「あやっばいいや」

「」

白目を向いて呆然としているニヨグ太をスルーして、丁度インドミナスの鼻先で吹っ飛ばされた所の件の竜を観察する。

全体的なシルエツトとしては、背筋にピツシリ生えている棘といい、何処となくインドミナス・レックスに似ている。

体色は黒で、黄白な線が胴体に走る。

足にはラプトルのような、曲がった、動く鉤爪が。

……あんなの、少なくとも映画には出ていないよな？

「ふ、遅れている貴様らに特別に教えてやろう!」

何処となく嬉しそうなドヤ顔で復活するニヨグ太。 とてつもなくウザイです。

まあ、話が進まないから止めないけど。

「そいつの名は、『インドラプトル』」

貴様らがこちらに來た1年後に上映された新作で登場する、ハイブリッド種だ」

「い、1年後?！」

このニヨグ太は、未來から來たともいうのか?!

それともイースの連中と一緒にいたから、未來視でも出來たつて言うのか?!

いや、それよりも、

「インドラプトル!?!」

「そう、ラプトルだ。」

インドミナス・レックスはその名の通り、テイラノサウルス・レックスをベースに造られたハイブリッド。

一方インドラプトルは、ヴェロキラプトルをベースとしている。

分かるか、この違いが。

インドミナスは所詮、客寄せパンダ。ホスキンス共が多少の悪意を混ぜたとはいえ、その本質は魅せモノだ! アトラクション用の玩具だ!!

だが、インドラプトルは違う!!」

立ち上がり、インドミナスに飛びかかってあつという間に全身から血を噴き出させるインドラプトルを指差し、高らかに宣言する。

「——そいつは最初から、軍事利用をする前提で造られたラプトル^{ハント}!!」

より賢く! より疾く!! より残忍に!!!

殺戮兵器であれと造られた生物兵器!!

インドミナスとはスペックが違うのだよ、スペックが!!!」

「!! ウソだろ?!」

劇中で圧倒的な存在として描かれたインドミナスが、目で追いきれない程のスピードでズタボロにされていく。お前は進○のり○アイ兵長か?!

ニヤル子たちが攻撃しようにも、同士討ちをするように誘導されて、ニヤル子に蹴りを入れてしまうクー子という、普段なら絶対ありえない光景が見られる。

「ちよつと待て、生物兵器?」

お前の目的は、僕らの世界にジュラシックパークの偽物を創ることじゃなかったのか?」

「ああ、そのつもりさ。

だが、貴様らニヤル子や、未だ俺を狙う邪神を始め、俺の成功を妬んだ連中がやってくるだろうからな!! 事実その邪神のせいだ俺の身体はポドポド! つまり、そんなヤツらを殺すための存在だ! まず手始めは——貴様らだ!!」

「グ……グギヤ、アア………」

インドミナスから力が抜け、倒れ込む。

「!? おい、大丈夫なのか?!」

「まだ息はありますが、大分キツいかと!!」

薄つすらと腹が上下するのを確認出来るけど、その動きは小さく、弱々しい。

ニヨグ太は自分で言った通り、戦えるような身体ではないから、インドラプトルに向き直る。

一瞬、ニヨグ太からアレの制御方を聞き出そうかと思つた。ていうか多分あのレーザーポインターなんだろうけど、相手はインドミナス以上に頭が回る。騙されていて肝心なタイミングで効きませんでしたなんてオチが過つたから無視。

「GISYAAAAAaaaaaa——」

伏したインドミナスに容赦なく爪を突き立てながら、こちらを伺うインドラプトル。

「……勝てそうか?」

「……少年。 答えを知っている質問をするのは酷いと思う」

「黙ってなさいクロー子。」

3人がかりでなら、なんとか……」

ズ、とインドラプトルの足が僅かにズレる。途端にニヤル子たちから、完全に余裕が消える。

「……真尋さんだけでも逃げてください」

「は？ お前らを置いていくわけないだろ」

「大変嬉しいのですが、流石に今回ばかりは洒落になりません」

「でもー！」

「いいからっ!!」

黒い甲冑に覆われたニヤル子が掻き消え、インドラプトルに殴りかかるも紙一重で躲かれる。

「……焼き尽くす」

「ふっ!!」

クー子の腕から噴き出た業火が鞭のようになって相手の動きを制限、その隙に黄衣の王モードのハス太とニヤル子の蹴りが繰り出される。

流石に避けきれなかったらしく、インドミナスの上から吹き飛ばされる、が。

「!? これでも効かないだ!?」

「こうなったら、合体技です!!」

ハス太が竜巻を作り出し、クー子の炎を纏ったニヤル子が、再度突っ込む。
よし、前にもデカイヤツを斃した、アレなら!

「G I I J Y A A A a a a !!」

真っ向から迎撃するつもりなのか、直線に疾り——??!

「?! しまっ、」

ギリギリでカクンと体勢を下げることでラリアットを躲し、そのまま走り抜ける。
その目は、

「少年!?!」

「八坂、?!!」

第9話

side 真尋

.....

.....

.....

.....あれ？

確か僕は、インドラプトルに襲われて……なんで意識があるんだろう？

薄つすらと目を開けると、赤い壁が目映る。

「……はい？」

つい出た間抜けな声に反応したのか、壁の一点が裂け、黄色い瞳が僕を見下ろす。

思わず悲鳴をあげそうになって、その瞳がインドミナスのだと分かる。
？　じゃあ、インドラプトルは何処に？

ブシュツツと血が何処からともなく降ってくる。

ふとそちらを見上げれば、インドミナスの首に噛み付くインドラプトルがいた。
いちぎるように首を左右に振ると、それにあわせて血が流れる。

喰

「——ツ?!?!?　お、おい！　大丈夫なのか?!?!?」

「グルルルルル」

目を細めると、首にインドラプトルをぶら下げたまま、ゆっくりと立ち上がり、

インドミナスがインドラプトルに負けるとでも思っているのか？」

「当然だ!! 俺が造った、最強の恐竜だぞ!!」

お前は黙つてろよニヨグ太!!

邪神も言いたいことがあるらしく、呆れたような雰囲気を漂わせて、

「……お前、馬鹿だろ。」

インドミナスが勝つに決まっているだろう」

そう、断言した。

「なぜそう言える?!?!」

「なぜ、か。」

ならば逆に聞くが——

レックスとRAPTOR。

それぞれラテン語で、『王者』と『略奪者』だ。

——王が、泥棒ラプトルレックスレックスのときに負けるとでも?」

そんな言葉を証明するように、辛うじて残っていた売店に、インドラプトルが叩きつけられた。

「……………ばか、な、」

「当然の結果だ。原作でも、ラプトルの名を冠する恐竜がレックスに勝てたことがあるか?」

「……………無いな」

インドラプトルが両手の爪を無茶苦茶に振るが、牽制にすらならず、蹴り飛ばされる。

「グルアツ!!」

「k u s o m a l a !!」

「……あのKYを血祭りにあげるのは私がやっておくよ。だからな、真尋。お前らはいつも通りにすればいいんだ。正直、今のお前らは見るに堪えん」

「……いつも、通り？」

「そう。いつも通り」

肩に手を置こうとして——身長的に背伸びしても届かず、二の腕を掴んで、インドミナスの方へ押しやる。

「ほら、お待ちかねだ」

「……いつも通り、か。」

「……いつも通り、ね。」

「じゃあまず。」

「なあ、アンタ。アンタにずっと言いたかった事があるんだ」

「ん？ 私か？ なんだ？」

「お慈悲」とか叫んでるニヨグ太をサクッと亀甲縛りに処している邪神に向けて、

「お前さあ、」

——キャラブレし過ぎなんだよ!!」

「△△□□〇〇! ニヨグ太シールド!!」

スコーン!!

「イギヤアアアアアアアア?! 目が、目がああああああ?!!」

投擲したフォークがニヨグ太の両目に突き刺さり、ム〇カに早変わりする。

「ホント、ずつとツツコミたかったんだよ。 シリアスの時しか出ないで、シリアスなセリフ吐くくせして、なんかあつたらネタに走りやがって!! 今のニヨグ太シールドだつてパタ〇ンだし!! さっきの刀だつて紅桜だし!! 1人用ポ〇ドで潰れるし!!!」

「ちよ、やさ、やめ、グボアー!?!」

フォークの雨を浴びせたら、全部ニヨグ太の急所で防がれた。 チツ!

「テメエもテメエだインドラプトルウ!!」

「GGYAAAAA?!!?」

フオークって恐竜にも通用するんだな。

「……え？ インドミナスが巻き添えくらってる？ ちゃんと血で滑る分を計算して曲投げしたから、当たるわけないだろ。」

「……物理法則仕事して、どうぞ」

「1番物理法則ガン無視してるお前らが言うな」

縛られて転がされてるニヨグ太の腰からハイパーイースを取る。

「なあ、僕ら元の世界に帰りたいんだ。これどう使うんだ？」

「こ、答えるのでm」

「そつか。なあそこの黒フード、お前自力で次元振動？起こせるのか？」

「黒フー……余裕で出来るぞ」

「じゃあお前は置いていくな」

頼む連れて行ってくれ!! 教える!! 教えるからあ!!! せめてそれ置いて行ってええええ!!!

ビツタンビツタン撥ねて自己主張する。その姿はまさに、まな板の上の鯉。

「じゃ、頼むぞ」

「あいよー」

「スルーヤメテエエエエ!!!」

黒フードがパチンツと指を鳴らすと、空間がスキマのように裂ける。

——高度10メートルくらいの所に。

「「「……………はっ??」」」

「んじゃ！ サラダバー!!」

呆然としている間に、浮いた黒フードが裂け目に飛び込んで姿が見えなくなり、すぐに裂け目が閉じる。

「……………ウソだろオイ」

お、置いて行かれた?!!

「こうなったらニヨグ太を拷m……尋問して使い方を聞き出すしかないようですね」
「待て待て待て待て待て待て!! 帰れなくなったら困るのは俺も同じだ!! 素直に教え
るからそのバールwおるたなていぶ!?!?」

堅いもので固いものをブン殴る音が連続で聞こえる。

精神安定の為に後ろを向き

「——楽しんでいるようになにより。

じゃ、これで本当にお別れだ、真尋。

——目おき醒ろ、ねぼすけぼすけ」

ジャリイイインと、何かを引き抜いたような音が響く。

紅い風が吹き荒れ——

エピローグ

side 真尋

『異世界であるジュラシック・ワールドに迷い込む』という、今までの中でもトップクラ
スのトンデモを体験した翌日。

疲れの残る身体を起こすと、

僕の首に嘔り付くシヨタがいました。

うわっ、涎でべつとりしてるし。

「がしがじ。

……あ、おきた。 ごはんよこせー」

……どうして、こうなった。

——テイラノサウルスに襲われた直後。

サラダバーとかほざいて消えた黒フードがやったのか、向こう側が見えなくなるくらい紅い風が吹き荒れたと思ったら、すぐに暴風が収まり、

気がついたら、出発点であるルルイエに戻っていた。

……なぜか、インドラプトルごと。

ニヨグ太を宇宙に打ち上げた後、インドミナスを例のドキドキノコ薬でロリ化させると、『せつかくですしやっちゃいましょうそうしましょう！』とインドラプトルにも薬を飲ませた。

フオーク片手にニヤル子をめている間に効果がでたらしく、縮んで人間になった姿

は、

『?!?!?!
え、う、え、えっえ
?????』

シヨタだった。

もう一度言おう。

シヨタだった。

あそここの恐竜は全部メスじゃなかったのか？

しかも例の制御装置、普通に効果があつたようで、未だに照準された僕を襲う。

3

頭身いくかいかないか位のチビッコだからダメージこそないけど。

……え？ ニヤル子も狙われてただろって？

『フヒヒヒヒ』とか言つて手をワキワキさせていたら、ドン引いていた。おいそれでいいのか生物兵器。

そんなこんなで
閑話休題。

僕らは、何故か更に1人増えた状態で帰ることになった。

その結果がこれだよ、全く。

——こいつらのことは分からないことの方が多い。

面倒ごとが、文字通り星の数ほどありそうな『次元振動』だって、まだ完全に片付いていない。

だけど、まあ、

「なんとかかなんだろ」

「ところで、ニヤル子は潜り込んでこなかったのか？」

「そこでれつくすがかじってる」

「ガリゴリ……あ、おはよう」

「↑血の海

「……ヤムチャしやがって」

特設キャラ説明

・ インドミナス・レックス

原作では開始以前に死亡していた、『i fの存在』。現在はロリ化して八坂家に居候。姿は人間時のシャンタツ君に近いが、髪が真っ白。

かなり無邪気で、他人の言う事をコロツと信じてしまう。でもインドラプトルとは仲があまり良くなく、よく喧嘩している。

パワー特化型で、ソファアを邪神ひとが座っているまま片手で持ち上げて投げつけたり、後のアト子絡みの話ではアトランティスのUSJに封印されていた某デカイだけのヤツを殴って伏せさせたりする。

ちなみに真尋の長扱いは未だに直っていない。

・ インドラプトル

ご存知、『炎の王国』の看板恐竜。

ニョグ太がインドミナスと、健康診断の目的で保管されていたブルーの血から採取したDNAを掛け合わせて造られた。なおオスなのは原作設定。現在はシヨタ化して八坂家に居候。姿はインドミナスと瓜二つだが、髪が真っ黒。

我儘で、ツンデレ。ついでに悪戯好き。インドミナスとは仲が良くなって、よく

喧嘩する。

スピード特化型で、稀にツツコミで放たれた真尋のフォークを回避するほど。雑魚を一瞬で殲滅したり、身体のカイ相手の全身を切り裂くことで戦闘に貢献。火力不足が現在の悩み。

・ ロバート・マルドゥーン

『ジュラシック・パーク』で登場したキャラ。ショットガン、スパス12を愛用。

経緯としては、パーク時はゲーム版と同じ『命辛々ラプトルを退け、後から来たもう一機のヘリで脱出』。その後、当時の経験目当てでマスラニ社に雇われ、ジュラシック・ワールドに。

恐竜脱走時の対処係に任命されていて、真尋たちが合流した時は独自にインドミナスを追っていた。よって、パツと見一般人に見える真尋たちを見て、『ジャイロスファイアで谷残った奴らが居たんだっけか（人数等は未把握だった）』と保護する。

・ 黒フード／邪神

《情報は削除されました》